



Title	「宗教人」 Robinson Crusoe
Author(s)	仙葉, 豊
Citation	Osaka Literary Review. 1973, 12, p. 37-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25726
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「宗教人」 Robinson Crusoe

仙 葉 豊

I

Robinson Crusoe の作者, Daniel Defoe についての本格的研究がなされはじめたのは、比較的最近に属する。1924年, A. W. Secord が *Studies in the Narrative Method of Defoe* を出したのがその嚆矢であろう。彼は当時まで行われていた, Defoe は the greatest liar ever lived であるという誤まれる伝説を打破すべく筆をとったとその序に記している。この目的のために彼は, Defoe が確かめもせず好き勝手に物を書いたのではなく, 当時入手可能な資料を十分参考にして, 彼の小説の筆をとったのだという事実を例証したのである。*Robinson Crusoe* に関していえば, よく知られた, Alexander Selkirk (1676~1721) の体験はもとより, Woodes Rogers の *Cruising Voyage round the World* (1718), *A Relation of the Great Sufferings...of Henry Pitman* (1689), Robert Knox の *Historical Relation of Ceylon etc.* 当時知られていた旅行記が *Robinson Crusoe* を書く際に参考にしたのだった。E. A. Baker がその歴大な *The History of the English Novel* で Secord の研究を, landmark と認め要約づくりにつとめたのも無理はなかった。

また伝記的事実も1937年のJ. Sutherland のもの, さらに1958年のJ.R Moore のものによって徐々に明らかにされて来た。Defoe は E. Gosse のように不正直で嘘つきであるという誤解が, これらの研究によって少しづつ訂正されて来たのである。たとえば, 見て来たように嘘を書くと批難された, Defoe のいわゆる, circumstantial realism にしても, *The*

Storm (1704) を書く際に彼が用いた、新聞広告を利用した嵐の記事の蒐集といういかにもジャーナリスティックな手段を思いおこせば、また違った観点から考えなおさねばならなくなっている。数字の羅列にしても、多くの根拠薄弱なものではなく、英国各地からの情報整理の結果のことなのである。^① Defoe 作品の source 研究ならびに伝記研究の成果は、見てきたように嘘をつく作家 Defoe という誤解を一步一步ただして来たといえよう。

II

さてこのような研究成果に立って Defoe 研究、ことに Robinson Crusoe の研究は1950年代の終りから60年代の中頃にかけて新たな光が投げかけられたのである。Ian Watt の *The Rise of the Novel* (1957), G. A. Starr の *Defoe and Spiritual Autobiography* (1965), そして J. P. Hunter の *The Reluctant Pilgrim* (1966) の3冊をあげておきたい。

Watt の *The Rise of the Novel* は Defoe, Richardson, Fielding の3人の作家に関する論考であるが、そのうちの *Robinson Crusoe* を扱った部分は、些か30頁ではあるが鋭い分析と洞察に満ちており、以後 Crusoe 論といえは必ずひきあいに出される程のポピュラーなものになった。彼の論点は次のようなものである。彼は主人公の Crusoe の性格の特徴として次の諸点をあげる。(1) Defoe の作品における主な登場人物はすべて金銭を追求しており、Crusoe も例外でない。Crusoe が家を飛びだすのも “to better his economic condition”^② なのである。(2) Crusoe はきっちり契約書をかわすという意味において良き Lockean である。(3) ちょうど金銭貸借表をつくって物事を考えるような習慣がある。(4) 労働を尊ぶ信仰が顕著である。(5) 他の人間に対する評価の規準は常に経済的なものであり、他の、たとえば宗教、政治上の意見、国籍の違い、身分の相違などの判断規準はほとんどない。とこれら5点から Watt は Crusoe の性格の根本的な特徴として、Homo Economics を剔出する。そしてさらに、この経済人 Crusoe という側面が、当時勃興しつつあり、後に西洋近代文明を発展させ

てゆく源動力ともいうべき中産階級のエネルギーを具現しているものであると結論づけている。Faust が、Don Juan が、そして Don Quixote が、西洋近代人の欲望を本質的に具現しているのと丁度同じように、経済人 Crusoe は極めて自然に西洋文明の神話とでもいうべきものの prototype としての位置を占めているといい、高く評価するのである。Watt の議論が Waber, Tawney 等経済学者の学説から多大の示唆を受けていることは論をまたないが、これらの学説は、資本主義社会の勃興と宗教（ことに puritan の）との間に強い関連を見い出していることから、経済的側面のみならず宗教的側面からの考察が、この Crusoe 像の探求においても欠かせぬことが予測されよう。この意味において、前述の Watt の経済人 Crusoe 解釈に対する批判という形で提出された、Starr や Hunter の宗教的側面からの Crusoe 解釈も、一見対立するように見えるがその実、分ちがたい主人公の性格の二面性を表わしているといえよう。

Watt の経済人 Crusoe という解釈を念頭に置いて、この本を読む時、我々は、たとえば次の様な一節に出会うと当惑せざるを得ない。

This renewed a contemplation which often had come to my thoughts in former time, when first I began to see the merciful dispositions of Heaven in the dangers we run through in this life ; how wonderfully we are delivered when we know nothing of it ; how when we are in quandary, as we call it, a doubt or hesitation, whether to go this way or that way, a secret hint shall direct us this way, when we intended to go that way...and I cannot but advise all considering men...not to slight such secret intimations of providence...certainly they are a proof of the converse of spirits, and the secret communication between those embody'd and those unembody'd...^③

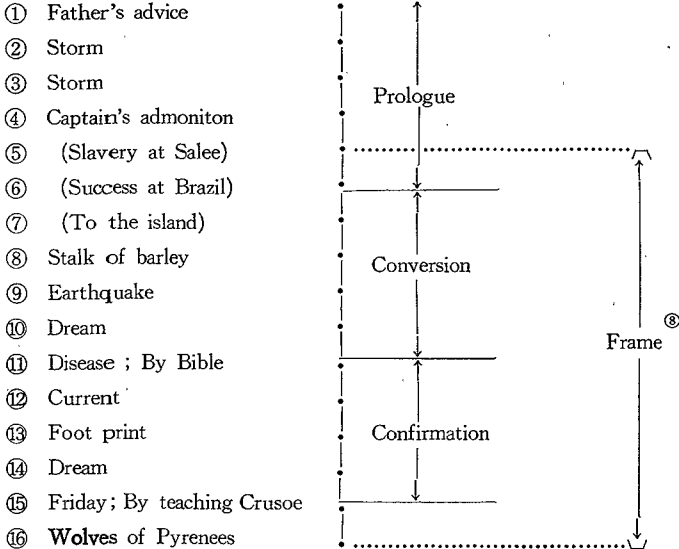
Crusoe は小説の至る所で反省をする。そして何らかの形で神の摂理を感得してゆくのである。無論 Crusoe の reflection がはたして serious な

ものであるか、それとも単に読者への義理立てにしかすぎぬのかは問題のある所なのだが、^④小説全体の構成から考えた、Starr, Hunter の論考によって、Crusoe の宗教的思索をそのまま serious なものとして受けとろうとするのが最近の傾向である。この宗教人 Crusoe という解釈はさらに構成という側面からも首肯される。

Starr, Hunter の両者は、Defoeが Robinson Crusoe を書く際に依拠したと思われる subliterate tradition の存在を指摘したという点において共通している様に思われる。Starr によれば、これは spiritual autobiography とされており、その内で主人公は自身の魂の救済への過程として “the provocation to repentance—reflection or consideration—self-accusation—conversion”^⑤ という四つの段階を取ることが構成上で顕著な点であるとする。Crusoe にもこの段階が見られると分析するのである。ここでは、Starr の意見を敷衍し、さらに詳細に検討を加えた Hunter のものを紹介する。Hunter は *Robinson Crusoe* に先行する伝統として次の三つをあげる。(1) Guide Tradition (キリスト教信仰をとく若者への精神指導書。この例として Hunter は Timothy Cruso^⑥ の *God the Guide of Youth* と Defoe の *The Family Instructor* をあげている。) (2) The Providence Tradition, (主に無神論者への反証として書かれたもので、あらゆる事象が神の摂理によって支配されていると説くもの。) (3) Spiritual Biography, (Starr のいう Spiritual Autobiography にほぼ匹敵する。Puritan の習慣であった日記をつけることと死者の簡単な履歴をのべた funeral sermon からおこって来たもので、魂の救済までの心の軌跡を描く。) この3つの伝統が Robinson Crusoe に与えた影響は単に主題や素材にとどまらず、構成にまで及んでいる。Robinson Crusoe のうちに “a rebellion—punishment—repentance—deliverance sequence”^⑦ という構成が見られるのはこの影響である、と Hunter は説くのである。Hunter 説によれば、Crusoe はまさに pilgrim なのであり、この物語は神を神とも思わぬ Crusoe が、孤島での体験を契機に徐々に神にめざめ信仰を獲得してゆくその心の動きを描いたものということになる。宗教人 Crusoe が前面に出てくるわけである。

III

以下 Hunter の説に従って Robison Crusoe の分析を試みるまず彼が何らかの形で宗教的思索を行う挿話を抜き出して表にしてみよう。



Robinson Crusoe は章分けもなく一見したところただエピソードを連ねただけのように感じるが細かく調べると前述の如く Prologue, Conversion Confirmation の三つの部分に大別できる。順次説明してみよう。

海への誘惑に負けた Crusoe は、家に留ってくれという父親の説得を無視して、ある日 Hull から海路 London へ向うが、途中二度の嵐に会い、船が沈没する。幸いにも乗組員は全員助かるが、その船長にも父親の忠告をくりかえされるのである。(前図①～④) 父親の命令にそむいたことは、後年改悛した時、Original sin の意識を Crusoe に植えつけるという意味で重要である。^⑨嵐はもちろん、神のいましめである。Hunter のいう rebellion の箇所がここにあたる。

弧島に漂着した Crusoe が出会った最初の宗教的事件は、大麦の芽(8)で

ある。彼の fortress の脇に、こんな土地には珍らしい大麦の芽が出ているのを見て驚喜する。そしてここから彼の conversion への第一歩が踏み出される。

"It is impossible to express the astonishment and confusion of my thoughts on this occasion. I had hitherto acted upon no religious foundation at all;...but I began to suggest that God had miraculously caused the grain to grow without any help of seed sown..."^⑩

このように一たんは神に目ざめる Crusoe もしばらくして真の理由が分るとすぐ信仰をすててしまうのである。

"At last it occurred to my thoughts that I had shook a bag of chicken's meat yet in that place, and then the wonder began to cease ; and I must confess, my religious thankfulness to God's providence began to abate too, upon the discovering that all this was nothing but what was common."^⑪

Defoe は性急に Crusoe に改悛をさせず、一歩前進してはまた後退するという工合に波のようなリズムを与えながら描いている点に注目すべきである。

さて、地震にあって九死に一生を得た Crusoe (9)は、そこに神の警告を見る程に成長するのだが、やがて決定的な conversion を迎える。夢と聖書への出会いがその契機として描かれている。風邪をひき床に伏せたままの Crusoe はある日、高熱と体の衰弱になやまされながら、自分が黒雲に乗り 炎につつまれたひとに槍で突き殺される夢をみるのである。当時の Puritan にとって嵐や地震、稲妻が神の警告として受けとられていたように、夢も重要な意味を持っていたことは言うまでもない。Crusoe もその例にもれず、涙を流し、以前の父親の忠告を思いだし自分をせめるのである。"Lord! Be my help" と神に祈りさえする。そうしてこの事件の直後、当時薬とされていたタバコをのもうと 箱の中をそぞいた時、Crusoe

はそこに “a cure both for soul and body” つまり聖書を見つけるのである。聖書を手にとってパラパラとめくっているうちに、たまたま心にしみる聖句を見つけ出しそこで conversion がなされるというわけなのだ。^⑩

“In the morning I took the Bible ; and...I began seriously to read it,...I was earnestly begging of God to give me repentance, when it happened providentially, the very day, that, reading the Scripture, I came to these words, “He is exalted a Prince and a Saviour, to give repentance, and to give remission.” I threw down the book ; and with my heart as well as my hands lifted up to heaven, in a kind of ecstasy of joy, I cried out aloud, “Jesus, Thou son of David! Jesus, Thou exalted Prince and Saviour, give me repentance!”^⑪

末尾の祈りを彼自身最初の祈りといっている。Hunter のいう punishment-repentance の箇所がここにあたる。

Crusoe の conversion を持ってこの小説が終りになるかというところではない。当時の puritan は conversion をした人間を perfect なものとは見ておらず、その後、信仰をさらに揺ぎないものにするべく予定された神の試練を経験してはじめて真の宗教的完成がなされる、と考えていた。Hunter のこの意見に従えば、Crusoe も当然この confirmation^⑫ という過程を経ねばならぬ。速い潮流に流されて、Crusoe の乗っていた小舟が危うく大洋に出てしまいそうになる episode ⑬のあと有名な海岸の足跡の事件⑭が描かれる。人食人種の足跡かと考えると Crusoe は恐怖におびえ自分の生活設計を変更せざるを得ぬはめになる。前述の考え方でゆくとこの二つの事件は Crusoe への神の試練と考えることができよう。やがて Friday 救出の挿話⑮が語られるのであるが、その前に Crusoe はまた夢⑯をみるのである。夢の内容は一人の土人を救うというものであるが、物語はそれと丁度同じ工合にすすんでゆく。

このように考えてみると、Friday 登場のこの物語に対する意味がほぼ

明らかになるのであろう。すなわち、conversion と confirmation は全く対比的に（事件の数も夢の存在も含めて）述べられているのであるから、Friday の果たす役割は単なる物語の変化というだけではなく、ちょうど conversion の部分で聖書の果たした役割と同質のものだといえよう。conversion を達成したものは必然的に他人への善導教化へと導かれる。Crusoe は Friday にキリスト教の知識を教えこもうとするのである。この過程で彼が逆に教えられるという事実は注目に値する。

I had, God knows, more sincerity than knowledge in all the methods I took for this poor creature's instruction, and must acknowledge, what I believe all that act upon the same principle will find, that in laying things open to him, I rally informed and instructed myself in many things that either I did not know, or had not fully considered before,^⑮

Crusoe が野蛮人を教化する際逆に自分みずからが啓発されより完全な puritan 精神に近づいてゆくのである。Defoe が *The Farthe Adventur of Robinson Crusoe* でこの蛮人教化による自己教化のテーマを発展させ Will Atkins とその蛮人の妻の間問答を描いているという点からも、Friday の役割は Crusoe の confirmation 完成のためと道具と考えることができる。^⑯

IV

さてこのように見ると、*Robinson Crusoe* には綿密な構成上の計算が存在することがわかるであろう。この作品だけに限れば構成が粗雑だという^⑰ 漱石の評価はあたらない。そして、この構成が Crusoe の宗教的体験を選択して成立させられているとすると、宗教人 Crusoe の解釈はますます有力なものとして浮び上ってくるといえよう。

〔註〕

Text 引用はすべて Aitken 編の選集を用いた。

- ① John Robert Moore, *Daniel Defoe; Citizen of the Modern World* p.152.
- ② Ian Watt, *The Rise of the Novel*, p.65.
- ③ Daniel Defoe, *Robinson Crusoe*, p.194.
- ④ 宮崎芳三, 「Robinson Crusoe の問題」, 『英国小説研究』, I, pp.161—168.
- ⑤ G. A. Starr, *Defoe, Spiritual Autobiography*, p.106.
- ⑥ Morton's Academy での Defoe の級友。後の高名な説教師。彼の名 Cruso (e がない) を借りたのは, Defoe がこの作品をつくる時に敬意をはらったからであろうとの Hunter の説がある。Crusoe の命名法には 他説がある。R. W. Ayers (*PMLA* 1967, oct. p.405) は, Crusoe と訛る前の本名, Kreutzauer がドイツ語し Kreutzen (十字を切る, 航海するの二通りの 意味をもつ) をほのめかしていることを指摘している。
- ⑦ J. p. Hunter, *The Reluctant Pilgrim*, p.89.
- ⑧ F. H. Ellis, は今まで無用の長物のようにいわれて来たこの Pyrenee での狼におそわれるエピソードが, 実は Crusoe が Salee から脱出する状況と酷似していることを示し島の挿話の Frame をなすといっている。*Twentieth Century Interpretations of Robinson Crusoe* p.13.
- ⑨ 当時の puritan 信仰では, 父親の言は神の言に等しかった。
- ⑩ *op.cit.*, p.85
- ⑪ *op.cit.*, p.86.
- ⑫ 同じ手法を Defoe は *A Journal of the Plague Year* で使っている。
- ⑬ *op. cit.*, p.106.
- ⑭ Hunter は deliverance という言葉を用いており, confirmation は私の造語である。宗教上の意味である堅信の意で用いたのだが適切かどうか分らない。御教授願えれば幸いである。なお Hunter は潮流の episode を無視している。従って conversion, confirmation 間の挿話の数と意味の類似には着目していない。
- ⑮ *op. cit.*, p.245.
- ⑯ ここでは構成面からのみの考察であるが, 比喩という点からもこのことは首肯されよう。すなわち, Friday を救出する直前に Crusoe は島から脱出する考えにとりつかれており, そのための手助けとして人が 現われるのを望んでいた。島からの deliverance が Crusoe の信仰上のそのの allegory なのはいうまでもない。
- ⑰ 夏目漱石, 「文学評論」